



## 一 島津重豪と聚珍寶庫

島津重豪は延享二年（一七四五）、鹿兒島城下の加治木島津家の屋敷で生まれ、宝暦五年（一七五五）、父重年の死去に伴い一歳で家督を継いでいる。以後、天明七（一七八七）に齊宣に家督を譲るまで藩主として三二年間、さらに隠居後も八九歳で死去するまで藩政に関与し、その後の薩摩藩の政治や文化に大きな影響を与えた。

重豪は薩摩の文化水準の向上を図り、極端な開化政策を行った。その代表的なものが、造士館・演武館・医学館・明時館（天文館）等の文化施設の創建、及び『南山俗語考』・『島津国史』・『鳥名便覧』・『成形図説』・『質問本草』等の各種図書の編纂刊行である。

ところで、重豪は中国語の辞典である『南山俗語考』を編纂し、侍臣とも中国語で談話をするほど中国語や中国の文化に興味を持っていたが、同じようにオランダ語やオランダの文化についても強い興味を持っていた。そのことは、歴代のオランダ商館長や商館付のドイツ人医師シーボルトとの親密な交流に見て取れる。

重豪は、彼等との親交を通して外国産の文物の収集を精力的に行ったが、文政一〇年（一八二七）「公かつてよりつとひ給ひし斯方及び海外殊方の奇物異産幾千百種類なるや算るにいとまなし頃間園中に土庫をいとなませたまひてここに收藏し給ふこの庫を聚珍寶庫と名付く其碑文を臣曾槃をして字を製せしめ石に勒せしむ」と、蒐集した品々を收藏するために江戸高輪別邸に土蔵を設け、「聚珍寶庫」と名付けた。

高輪別邸は重豪が寛政八年（一七九六）から隠館を構えた藩邸である。

先是、天明丁未重豪告老營隱室芝邸内、雖謝公務尚

不能無世塵之煩、且舍屋陝隘不堪久居、於茲去

冬出私藏之金、使刈莽蕪降沙石更興葺隱館於江

府城南高輪第高輪第者、時昔寬陽公告老之後所隱極、  
津国公亦初年老於斯、爾來穢壞久之、至今茲三月

落成、故十三日率季子時之丞、為次郎・乘之助移徙于高

輪別墅、則使告之于官且述已往有賜 上使于重

豪尚於芝邸拜之、而命家老出令數條戎邸中勤

番輩、以出入往來守舊範、不忘非常各勤其職貴

質樸禁放酒等之事、其他盡定法約、今不枚舉于

茲云、<sup>(3)</sup>

重豪は隠居後も数年間は芝藩邸内の隠室に住んでいたが、寛政八年（一七九六）私藏の金で高輪藩邸に隠館を造り、三人の子供を連れてここに移った。また邸園の総称を蓬山と改め、靄之渡・環江などの名称を付けた。

一 當分高輪御殿之地面

右蓬山 ヨモギヤ

一 右御本門より南方稻荷坂下迄

右靄之渡 ツルノワカリ

一 右同向御屋敷

右環江 ウヅマキ

右之通相唱侯様被 仰出候付、於爰元者向々江致通達  
候間、其元申渡之儀何分可被取計候、此段申越候、以上、<sup>(4)</sup>

さらに「蓬山」園中に稲荷社天女宮観音堂關帝廟を齎ひ其側に葡萄架をつくり弄玉の亭を擬造し其北に花欄を耕し大石盤の度景（時計）を安す<sup>弄玉の度景ハ共に 蕃國の製を摹す</sup>と「忽ち舊観を改」めた。<sup>(5)</sup>

そして天保四年（一八三三）、八九歳で亡くなるまで、ここ蓬山隠館が重豪の文化活動の舞台となる。

さて、「聚珍寶庫」には碑文によると、「寶貝・玉石・古印・古瓦・百般精工窯器・奇物異産」等が収蔵されたとあるが、具体的にはどのような宝物が収められていたのであろうか。それを示す直接的な史料は残されていないが、文化二二年（一八一五）に左大臣近衛基前と前大納言甘露寺篤長をそれぞれ高輪藩邸に招いた際の記録に次のような品々が見られる。おそらく「聚珍寶庫」にもこのような品々が並んでいたであろうと思われる。

（近衛左大臣様高輪御屋敷江御招付御節記）

高輪御屋敷

龜之甲茶屋

觀瀾亭

一床掛物

中寿老婦  
左右籠

三幅對

探幽筆

立花 花瓶

唐金

臺

棚

軸物 面唐寅書文 軸受

香爐 南京染付

香合 堆朱

小座敷

一床掛物 山水之絵

古法眼元信筆

一幅

硯箱 料紙

文臺

棚紅毛菓子入

御見物所

一床掛物 芙蓉小鳥之絵

周之免筆

一幅

置物 鹿

臺

中庭茶屋

瀛樂窟

一床掛物 柳尾長鳥之絵

雪舟筆

一幅

掛花入

棚

菓物 彩色素焼

申々亭

一床掛物 紅白牡丹

紀伊中納言治寶殿画讚

二幅

中央 香炉

一輪活

棚

沉箱

竹影人形

拜領

丸鏡

臺

〈保壽樓〉

一 床櫛木東方朔置物香爐 交趾燒 臺

居間

一 床掛物 六組之絵 尚信 一幅

鷹置物 臺

棚

牛置物 紅毛本國燒

桃 象牙細工 鉢

琵琶 袋入

二階

一 床掛物 新古長城之図 一幅

書棚

水晶玉 臺流金

鷄置物

唐本 〈三峽〉

棚

塔 唐銅 臺

古物獅子

盆石 盆

花月庵

一 床掛物 蓬萊之絵 貞置筆 一幅

棚

唐物天目 臺

硯箱 秋の、蒔絵 料紙

勝手棚

茶道箱

羽箒

水瓶

喚鐘

水屋棚

風呂 源次郎作

釜 松竹梅

水指 南京染付

茶碗 異業 絵高麗

茶入 肩付源十郎 袋唐織織子

棗 龍眼木

茶杓 銘芹川 風早三位公雄卿作

蓋置 三開入 南京青磁

炭取 民之齋作

香合 織部好

鬚 紗張

以上

涼風園

一 床掛物 紅毛彩色銅板絵 一幅

柱孔雀尾扇

高卓

紅毛晴雨出没人形

紅毛砂時計

鐘木

紅毛押  
 紅毛白石人形  
 紅毛硝子鈴  
 琥珀  
 紅毛硝子刷毛  
 天眼鏡  
 紅毛硯  
 紅毛虫眼鏡  
 ヲルゴル樂器  
 紅毛劍杖  
 南蠻劍  
 魯露西亜國劍  
 エンゲルホール  
 紅毛椅子  
 二之間 二脚  
 壁  
 ループル  
 紅毛鼓弓  
 ワルトホールン樂器  
 ハルシヤ國人形男女  
 角棚 紅毛硝子器品、飾附  
 柱 紅毛硝子掛燈燵  
 (6)  
 以上

甘露寺前大納言篤長卿高輪御屋敷御招付御飾記

申々亭

一床掛物 山水之繪 法眼養朴筆 二幅對

活花 臺

棚

獅子香爐 南京錦手

重香合 堆朱 盆

軸物 清明三河図 盆厚貝

保壽樓

一床 櫛木東方朔置物

香爐 交趾燒 臺

居間

一床掛物 周之冕筆 一幅

盆石 盆

棚

壽老人 竹彫

白硝子菓子入

琵琶

二階

一床掛物 牧童之繪 元信筆 一幅

書棚

沉香箱 唐燒錦手

水晶 臺流金

唐本

棚

銅塔

紅毛本国焼

馬置物

硯箱 料紙文台

中庭茶室

瀛樂窟

一床垂撥 花

棚

料紙箱

龜之甲茶屋

觀瀾亭

一床掛物

置物 銅麒麟

棚

孔雀置物 流金

手鑑

葉壺

茶室

花月庵

沢庵墨跡

一床掛物

棚

天目 唐物

硯箱 卷紙

勝手棚

龍眼肉 青磁鉢

壽星 綠瑪瑙

六角蓋物 南京染付

喚撞 撞木

水屋棚

風爐 奈良

釜 松竹梅

水指 紅毛本国焼

茶碗 首磁 染付

茶入 志野

棗 秋の、蒔絵

茶杓 利休作

蓋置 三閑人

炭取

香筥

翻 紗張

以上<sup>(7)</sup>

なお、この「聚珍寶庫」はいわばわが国最初の博物館と位置付ける事が出来ようが、博物学者の上野益三氏も、「宝庫の内容は必ずしも博物学的蒐集とは限らないが、私設博物館として、ヨーロッパの初期の博物館本蒐集家の陳列室<sup>ギャラリー</sup>に比すべきものである。」と述べ、「(碑文中)『ソノ真ヲ識ルコトヲ欲』したところ、博物学者重豪の真骨頂であろう。」

と重豪を評価している。<sup>(8)</sup>

## 二 「聚珍寶庫碑」の現状

石碑の寄贈申請があつてから約一月後の八月三十一日、石碑の現状を確認するため現地調査を行った。東京事務所の高岡忠勝所長も同行していただき、乃美室長・片岡会長夫人立ち会いのもと石碑の実測及び聞き取り調査を行った。

まず片岡会長宅であるが、東急池上線雪谷大塚駅から徒歩五分ほどの静閑な高級住宅街の一角にあり、広さは三〇〇坪弱といったところである。この土地は昭和三八年に島津氏から購入したものであるが、旧家は取り壊し更地にして明け渡したが、庭の樹木及び石碑はそのまま残していったそうである。

なお『しらゆき』には雪ヶ谷の邸宅について次のような記述がある。

「袖ヶ崎が地所は三万坪、三河台が三千坪、雪ヶ谷が三百坪足らずであったから、スケールが段々小さくなって百分の一になってしまった。母など着物を着替えるところが隣家から見るといつて嫌っていたが段々慣れて余り気にしなくなった。この場所は東急池上線の駅から五分位のところにあり駅前にはマーケットが沢山あり割合便利なところであった。

しかし建物は戦争直前のものでどこか手がぬいてあるらしく、ひどく雨もりするところがあったり、冬は隙間風が入ってきて寒かったりするし、両親も年をとって来たのもう少しましな家をといてきることになって昭和三十五年頃から物色を始めた。昭和三十七年に世田谷区上馬に極めて恰好な家が見つかり十月十六日に引越した。<sup>(9)</sup>」

ちなみに明治維新後の東京における島津氏の邸宅の変遷は、『しらゆき』等によると次の通りである。

### ① 袖ヶ崎邸

明治初年から所有。仙台の伊達氏から譲り受けたという。忠重は忠義の死後明治三二年に上京、しばらく袖ヶ崎邸に住んだが、その後は永田町邸、愛宕町邸等に住み、大正一二年関東大震災後に正式に本拠を構えるようになった。建物は始め日本建築であったが、イギリス人建築技師コンドルの設計で煉瓦造りの洋館が大正六年早春に完成した。敷地は約三万坪あったというが、第二次世界大戦中、このような大邸宅は不適當ということで日本銀行に譲り、三河台邸に引越した。(現在袖ヶ崎邸の跡地は清泉女学院となっている。)

### ② 永田町邸(二丁目)

明治三二年一月に吉井友実氏より購入。現在国会議事堂の敷地で、大正二年七月に手放した。

### ③ 愛宕町邸

永田町邸が議院敷地となることになっていたため、永田町の建物を愛宕町に移築した。元の所有者は高木兼寛。大正五年一月引揚げ、その後(大正八年)三州倶楽部に譲った。

### ④ 永田町邸(一丁目)

愛宕町邸は、余り隣家が近く火事の危険があることなどの理由で、大正五年一月、再び永田町(今度は一丁目一八番地)へ戻った。この建物の洋館は古い煉瓦造りで明治初年大山巖が建てたものであった。日本館は前住者の村井氏時代のものであったが、取り払って

忠重自身の計画で新築した。大正二二年の関東大震災で洋館の一部が甚だしく破損したため、その年の一月に袖ヶ崎に引越す。この永田町邸は後に鉄道大臣官舎となっていたが、戦災で焼失した。

#### ⑤ 三河台邸

昭和一九年五月に袖ヶ崎邸より引越したものの戦局は日増しに悪化し、玉川学園の小原国芳氏の斡旋で町田市の井川氏宅へ疎開する。昭和二〇年五月二六日の空襲で離れの茶室一棟を残して土蔵を含めて完全に焼失。

#### ⑥ 広尾邸

昭和二〇年一月、堤康次郎氏が持っていたこぢんまりした一軒家へ移る。昭和二三年六月二〇日頃、大田区雪ヶ谷に適当な家が見つかり引越す。

#### ⑦ 雪ヶ谷邸

前述の通り、昭和二三年から移り住み、建物が古く余り住み心地が良くなかったようで、昭和三七年世田谷区上馬に引越す。

#### ⑧ 上馬邸

元日東紡役員 of N氏が新築したものを事情があつて手放すことになり購入。昭和三七年一〇月一六日引越す。家は雪ヶ谷より一割位広いだけだが、建築は新しく遙かに上等。

石碑は、おそらく昭和二三年に島津氏がこの雪ヶ谷に移ってきた際に持参し、庭に建立したのであると推測される。ところが、昭和三七年に上馬に引越す際には、何らかの事情で石碑はそのまま雪ヶ谷に残された。碑文の「源重豪栄翁撰」と「永世」の文字は、その時削り取られ

た可能性もあるのではないか。いずれにしても、これらの文字は自然に摩耗したのではなく、故意に削り取られたものと思われる。

さて現在石碑は、庭園の片隅にひっそりと建っており、庭園にとけ込んで非常に風情があつた。自然石の台座の上に設置されており、接合部分には白い漆喰のようなもので接着してある。台座の石は最初からの物ではないようだ。碑の本体は、高さ一二〇センチメートル×幅六三センチメートル×厚さ一三・三センチメートルと意外と小さな感じがした。桜の老木の木陰にあるため表面は一面苔に覆われ、文字の判読は困難であつたが、指先で苔を剥ぐとはっきりと読みとれる。きれいに洗浄すれば、十分展示にも耐えられるであろう。

ところで、乃美室長が東京事務所に持参した拓本は、苔むした石碑からどのようにして取ったのか不思議に思い尋ねたところ、拓本は三〇年ほど前に取ったもので、それを大事に保管していたのだということであつた。

黎明館では、史料による調査・現地調査をふまえ、黎明館専門委員の先生方の助言もいただき、次のような結論を出した。

① 本来この種の資料は、現地で保存する方が好ましいのだが、元々この地（雪ヶ谷）に建てられたものではなく、戦後ここに移設されたものであるので、必ずしも現地で保存しなくても問題はない。

② 現在は片岡会長の厚意で大切に保存・管理がなされているが、将来石碑の内容や由来が風化してしまうおそれもあるので、個人よりも公の施設での保存・管理が望ましい。

③ 島津重豪に関する数少ない実物資料であり、聚珍寶庫はわが国最初の博物館でもあるので、現代の「聚珍寶庫」ともいえる黎明館で収



蔵・展示したい。

④現時点では石碑の表面は一面苔が生えており、文字の判読は困難であるが、きれいに洗浄すれば十分展示に耐えられる。なお設置の場所については野外展示とする。

以上の結論を得て、片岡氏に対し黎明館（鹿児島県）への寄贈の申し出を承諾する旨の返事をし、係る諸事務手続きを行った。

全ての手続きを終え、平成一二年三月八日、石碑の搬送作業を行うため上京した。鹿児島県東京事務所の富岡所長にも同行していただき、資料寄贈に対する知事の感謝状も所長から渡していただいた。

作業はまず石碑を台座から取り外す作業から始めた。（石碑のみ移動し台座はそのまま残すため）作業は専門の石職人が手作業で行い、まず接合部をノミで丁寧削っていく。接合部は当初漆喰ではないかと思われていたが、実際に削ってみるとセメントであった。この事からも台座の石が元来本体とセットだったのではなく、石碑がこの地に設置された際に使われたということが判明した。

次に、台座からはずした石碑をトラックまで運搬する作業だが、邸宅が道路より三メートルほど高いため、当初クレーンで吊り上げて敷地から運び出す方法を考えていたが、実際は隣家の敷地内を通していただくことになった。ただし隣家との木戸の間口が狭いことや庭木や敷石などを傷つけないよう細心の注意を払いながらの作業であった。

トラックに積み込まれた石碑は、茨城県土浦市の営業所まで運ばれ改めて厳重に梱包され、無事黎明館に到着した。

今後は、なるべく早い時期に黎明館敷地内のしかるべき場所に設置する予定である。

#### 【注】

(1) ○は文字が削り取られていて判読不明な個所であるが、曾繁著『仰望節録』（玉里島津家資料）によると最後の行の判読不明な個所は「源重豪榮翁撰」で、後ろから3行目は「永世」であることが確認できる。また6行目の「後世若惜」は『仰望節録』では「惜後世若」となっている。

(2) 『仰望節録』、聚珍寶庫の碑文第三十一條。

(3) 『旧記雑録追録』七、三五九文書。

(4) 『旧記雑録追録』七、三六五文書。

(5) 『仰望節録』、隱館の地をトし玉ふ第十一條。

(6) 『旧記雑録追録』七、四二八文書。

(7) 『旧記雑録追録』七、四三一文書。

(8) 上野益三『薩摩博物学史』（島津出版会）一九五頁。

(9) 『しらゆき——島津忠重 伊楚子 追想録——』（島津出版会）四八六頁。

#### 【後記】

最後になりましたが、今回貴重な資料を御寄贈いただきました片岡勝太郎氏の御厚意に深謝致し、仲介の労をとっていただいた乃美元彦氏・富岡忠勝氏にも改めて感謝申し上げます。その他お世話になった多くの方々にもこの場をお借りしてお礼申し上げます。



庭園の片隅にひっそりと建つ聚珍寶庫碑



左より 片岡夫人、乃美室長、富岡所長、片岡会長



数人がかりで台座からはずす



台座との接合部を職人が手作業で削っていく



クレーンでトラックに積み込む



隣家の庭を通り搬出する